

曹洞宗務院御編纂

曹洞宗兩祖略傳 全

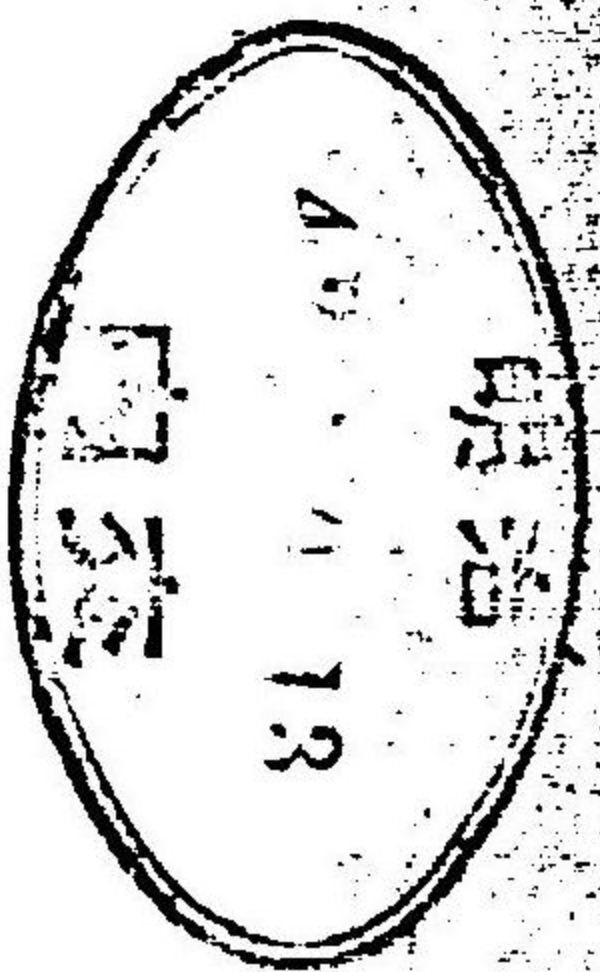
259

663

曹洞宗兩祖略傳

○高祖大師御傳

謹んで大日本國曹洞宗高祖越前吉田郡永平寺開山佛性
 傳東國師承陽大師道元大和尚の御履歷を原ねたてまつ
 るに御俗姓は人皇第六十二代村上天皇九世の孫久我内
 大臣源通親公の御三男にて御母は松殿關白太政大臣藤
 原基房公の御女なり頃は土御門院の御宇正治二年庚申
 正月二日に御誕生まじませしが眼に重腫ありて七處平
 満じ自から聖人の相をかはりたまひけり然れば四歲建
 三年にして李嶠の百詠を讀み七歲建永元にして毛詩左
 癸亥



傳を讀たまふなど世に比類なく生立たまひけり然るも
 八歳承元元年の冬に御母逝去させたまひければ流石に恩
 愛の悲涙に沈ませたまひ終夜其御枕上に坐せしが焼た
 る香の煙立ち立ては消え立ては消る有様をつくと
 見なはし浮世の中の無常なること皆此煙のことならず
 有ると見るまに空きを何事にか執着してはかなき榮花
 を求むべき早く出家得道して無上菩提の悟を開き一切
 衆生をも濟度せんとの大願心を發したまひ志こそ尊ふ
 とけれ然れば九歳承元二年の御時より世親菩薩の俱舍論
 を初め内典外典に涉りて御學問おこたらせたまはさる

も皆是れ我等が如き衆生の迷を救ひたまはんと御心
 なりとは知る人更にあらざれば御母の兄君にて松殿攝
 政師家公と申し奉つれる御方は善き姪もちたり我子と
 なして攝政關白の重職をも繼志めばやと思志召すを中
 々にうるさくや覺えけん遂に十三歳建曆二年の春の夜に
 私に都を忍び出で同く御母の御兄にて比叡山におはす
 良觀法眼の許に到り切に出家を求めたまひ志かば法眼
 いたく驚きたまひ近き内には元服と聞侍り志にとのた
 まふを打消したまひて母人御臨終の御遺言もおぼろけ
 ならず且つは浮世の榮花あと願ふべきに非すとして發心

堅固にましませば法眼をうるに感涙を濺ぎたまひて頓
 て横川首楞嚴院の千光房へぞ登せたまひける斯て其翌
 年建保元年癸酉四月九日天台の座主公圓僧正に得度を
 受け十日に比叡の戒壇にて菩薩戒を受たまふ是より天
 台八教の學問は更なり秘密一乘の教理をも深く探り精
 く求め夜を日に繼て勵みたまひしが十五歳建保二年甲戌の御
 時に一つの御疑をぞ發したまひける其は何れの經論の
 道理にも本來本法性天然自性身として我等一切衆生の身
 が此身此儘天然の佛なるかと説せたまふことなるが若
 し生れつきたる儘が直に佛なりと云はゞ三世の諸佛を

始め奉つり我々に至るまで何とて發心修行して偕て其
 後に成佛することなるぞとの御疑なり其頃三井寺の公
 胤僧正は天下に比類なき學匠なりとの聞え高かりけれ
 ば往て此義を問ひたまひしに僧正頭を傾けたまひ此義
 は輒く答へ難し建仁寺の榮西禪師に問ふこそよからめ
 禪師は先年唐土より皈らせたまひて教外別傳の宗旨を
 弘めたまへり疾く往て問むたまひとぞのたまひける然
 れは是より建仁寺に赴きて初て禪宗を學びたまひしに
 翌年建保三年乙亥七月五日と云ふに榮西禪師は入寂せ
 たまひしかば其御弟子ある明全和尚に隨從して愈々禪

宗の修行を勵み又一切經をも二度まで讀せたまひしか
 ど迪も日本にての吾が師とたのみ參らすべき人あらじ
 寧ろ唐土へ渡りて正法の師を得ばやとの廣大なる悲願
 心を起したまひける斯くて廿四歳貞應二年癸未の春二月二
 十二日に明全和尚に従ひて京都を出立たまひ三月下旬
 に筑前の博多の津より船出まて大宋の嘉定十六年癸未四
 月の初に唐土明州の港に着きたまひ志が暫志が程は船
 におはまて諸寺諸山の様子を探りたまひ遂に七月天童
 山に錫を掛たまへり此時天童山には無際了派禪師と云
 る智識おはせ志が日本人を賤みて明全和尚も大師を

も唐土の僧の末席にのみ坐せ志めければ大師大に憤ふ
 らせたまひ凡そ佛法に入て戒を受たる者は其受戒の順
 序にて坐を定むべきも他國の人として末席に置くは法に
 背けり勅詔を以て之を正志たまへてよと二度まで宋の
 天子に上表志たまひ志かは遂に天童山に勅詔志法の如
 くに坐位を正志志めたまへり是より大師の御名四方に
 聞えて昔より空海最澄など云る高僧も多く渡りたまひ
 志が斯くばかり法を重んと且つ日本の國の光を唐土に
 輝かせしはあらざとて人々驚嘆志たりけり其頃天童山
 に隆禪と云る日本の僧ありて傳藏主と云る人の所持せ

る嗣書を大師に見せまへらせ又惟一西堂と云る人も宗
 月長老と云る人も皆嗣書を見せまへらせけり此嗣書と
 云ふは釋迦牟尼如來より迦葉尊者へ正法を傳へ迦葉よ
 り阿難阿難より商那和修と代々相傳へて二十八代達磨
 大師に至り達磨より慧可慧可より僧璨と又代々に傳へ
 たる正法傳授の血脈にて他宗他門には其名をだも聞か
 こと能はざる者なれば唐土に來りて禪宗を學べばこそ
 斯る見難き者をも見て傳授正き佛法を聞くことを得た
 るなれとて深く喜びたまひけり又或時は僧堂の内にて
 隣單に坐せる僧の袈裟を頂戴て掛るを見て袈裟の功德

を感じたまひ又或時は三韓より來れる僧の袈裟をも鉢
 をも知らず法て在家の人の如くなるを見たまひ唐土に
 來らすば我も眞の佛法を知ること能はざりけんとして且
 つ慚ぢ且つ喜びたまふことも多かり志斯くて二年が程
 も天童山におはせしかば無際了派禪師より屢々悟道の
 許可を受たまひしかば自ら之を肯ひたまはす遂に天童
 山を下りて徑山に登り又育王山萬年寺など云る名山巨
 刹を巡りたまひて多くの智識に見えたまひしが是を師
 範と頼むべき大善智識にも逢ひたまはねば再び天童山
 に販りて無際禪師を訪ひまへらせんと思せしに禪師は

既に入寂せたまひしと聞て大に歎かせたまひしが去ら
 は日本に販るべし天童山におはす明全和尚は何よした
 まひしやらん右も左も彼山にとて赴きたまふ折から老
 璣と云る僧の話の聞けは今の天童山の住持なる如淨禪
 師こそ天下に雙あき大善智識なれ疾く往て見えたまへ
 と勧めしかば急き天童山に登りたまひて如淨禪師に見
 えたまひしに禪師直に告てのたまはく佛々祖々面授の
 法門現成せりと是れ大宋の寶慶元年乙酉大師年五月一
 日のことありけり此時如淨禪師又左右の人に告てのた
 まはく昨夜洞山悟本大師を迎ふると夢みたり此日本の

僧恐らくハ大師の再來なるべし我宗此人に憑て大に隆
 ならんとて喜とばせたまひしとぞ斯て明全和尚を訪ひ
 たまひしに和尚先頃より重病に打臥したまひしかば大
 師の訪ひまへらせしを喜びたまふこと大方からす然る
 に是月七日と云ふに四十二歳を一期とて遂に遷化志
 たまひまかは其遺骸を火葬して舍利を供養したまひけ
 り是より親く如淨禪師に参問し日夜を分かす辨道修行
 志たまひま様は寶慶記に委く記したまひしかば志あら
 ん人は彼書を拜讀して祖師の御恩の廣大無邊なること
 を知らるべし斯くて或日の事ありまが一人の僧の坐睡

せまを如淨禪師が痛く呵りたまひ志を大師その傍にて
 聞たまひ豁然と志て無上菩提の悟を開きたまひしかば
 直に方丈に上りて如淨禪師の印可を受けたまひ同く九
 月十八日に佛祖正傳の大戒を受たまひ志が是れ實に釋
 迦牟尼如來より第五十一代の正傳にて嫡々相承の大事
 ありと斯て翌年 寶慶二年丙戌も又其翌年も彼國におはしまし
 て江西其他の處にも遊歴またまひ寶慶三年丁亥の冬に
 至て販國の旅装をなしたまひ如淨禪師に暇を乞たまひ
 志かば其夜の夜半に入室せしめたまひ芙蓉道楷禪師よ
 り傳はれる袈裟及び寶鏡三昧五位顯訣ならびに禪師自

贊の畫像など與へたまひて離別の垂誠懇切なり志斯く
 て大師は残るかたなく所願満足せさせたまひ愈々明
 日は日本へ歸る旅路に登らんと支度を調ひたまひたる
 其日の薄暮に偶々佛果園悟禪師の碧巖集百則十卷を
 見たまひ一夜の間に之と寫したまひ心を世に一夜碧岩
 と稱して最とも崇とみ重んとて今に加州の大乗寺に秘
 藏せり大師が此の碧岩集を寫したまひし其夜半に白衣
 の神人來りて助筆せりとして墨色も二つに分れたるが其
 白衣の神人は加賀の白山權現におはせしと言傳へたり
 偕て翌日天童山を下りて此冬直に船出したまひしが海

上にて浪風荒く既に御船も危かりしに大師普門品を念
 じたまへは觀世音菩薩一葉の蓮に乗せたまひて浪間に
 浮びたまへりとするまよ風止る浪おさまりて程あく肥
 後の川尻に着船したまひしは最と不思議ある事なりけ
 り此時日本安貞斯て大師は是より直ちに京都に上り東
 山の建仁寺に三年が程を経たまひけり其後寛喜年間に
 は深艸の安養院と云るに閑居したまひ其地に極樂寺と
 云る寺の舊跡ありしを興したまひて天福元年癸巳大印
 四十の春に興聖寺を建立したまひ其夏初て結制安居し嘉
 禎二年丙申大師年三十七の冬の初に開堂の法式を行ひたまひ

孤雲懷奘禪師を首座に請して極月三十日に乘拂說法を
 行はしめられたり此孤雲禪師と申したてまつれるは元
 と天台宗の學匠なりしが大師の御徳に皈依しまへらせ
 文暦元年甲午のとしに初て大師の御弟子とあり此冬首
 座とありたまひ遂に大師の御法脈を繼せたまひて後に
 永平寺の二代禪師とならせたまひ志かり偕又首座と云
 ふことも日本にては此時初て立られたることありとぞ
 斯くて興聖寺の御化導十年が程を経たりければ出家在
 家の人々數多まへりて御教を受たる中に淨土宗の三祖
 鎌倉光明寺の開山記主禪師良忠上人同く京の九品寺覺

明上人臨濟宗の由良興國寺開山法燈國師其他門の人々の道を問ひ法を聞たまひまも甚た多く遂に宗旨を改め衣を更て御弟子とありまも少からず肥後の大慈寺開山寒巖義尹禪師の如きは後鳥羽天皇の御子にて初め天台の僧なりまが大師に皈依たまへらせて仁治二年の事かどよ遂に大事を授りたまひ後に大師の御法孫なる徹通禪師の法脈を継ぎたまへり又是年仁治二年壬寅の四月と云ふに近衛殿の御招請に赴きたまひ御法談ありけりまが近衛殿の間せたまへるやう禪宗と云るは昔より我國に傳はりまことありまにやとありければ我國に佛法

初て渡りまより四百年餘になりぬれど唯名と相とのみの佛法にて鎮護國家まと云へる祈りの僧のみ多かりければ眞の佛法の傳はれるは今を始となすべきにや昔も唐土に佛法の初て渡りしときも四百年が程は名と相とのみにて以心傳心の宗匠はなかりしに梁の代に達磨大師渡りたまひて眞の佛法を傳へたまひぬ唐土も我國も四百年ほど経たる後に眞の佛法の傳はれるも亦た不思議なりと答たまひけり然れば學道用心集普勸坐禪儀辨道話典座教訓衆寮清規知事清規等は更なり正法眼藏の百卷も廣録の御垂戒も大方の興聖寺にての御教示なり

しとが斯て是年の十二月十七日に波多野出雲守藤原義重の招請にて其宅へ赴かせたまひて御說法あり此人は大織冠鎌足公の遠孫にて田原藤太秀郷十九代の孫かれは鎌倉將軍の御内にて弓馬に名高き人なるが深く大師に皈依しまへらせければ其知行所の内にて越前國吉田郡の山奥に清閑ある古寺あるを再興して大師に寄附したてまつりたき由申されけるに大師の御師匠なる唐土天童山の如淨禪師は越と云る處の御方なりしめは今その越州と云ふ名を聞くたに懐しきに況て此深艸は都に近き處なれば公卿其他の訪ひ來るも中々にうるさし

度の方便は然ることあり早や說法に赴きたる大家の數も百箇所に餘り菩薩戒と授けし弟子も二千餘人に及びり然れば縁ある人々より清閑ある山林園地など寄附せんと云ふも十二箇所に及びたれと何れも未だ意に適はず而るに今越州の山奥なりと聞く上は速かに赴かばやとて大に喜びたまひけり斯て其翌寛元元年癸卯大師四月十六日に深艸を立せたまひて最初は越前松岡の溪の奥なる吉峰と云る處に着せられ又禪師峯と云る處に移りたまへり波多野義重は左金吾禪門覺念是は真柄左馬助等の先と共に寺地を傘松の邊に定め閏七月十七

日に地平志を始め寛元二年甲辰大師年四月廿一日に法
 堂の柱立あり七月十八日に開堂の法式を行なはせたま
 ひて傘松峰大佛寺と名けたまひ志が寛元四年の六月に
 寺を永平寺と改め山を寶治二年に吉祥山と改め
 たまひける斯て寛元三年乙巳大師年四月の事とかや結
 夏の上堂とて尊き法式を行はせたまひしに天華と云る
 もの多く降りて参詣の人々皆之を見たり是は高德ある
 御方の御法を説せらるゝ處には昔より屢々其例あると
 して天人より供養志まへらする花の降り志ありとか
 や又寛元五年丁未大師年正月十五日に布薩を行はせたま

まひ志ときにも五色の雲の彩影のたなひきて久く障子
 に停まりたりしとぞ是年二月廿八日又改曆あり鎌倉の
 執權最明寺時頼入道道崇より頻に招請ありければ八月
 三日に鎌倉へ下向したまひて道崇はしめ老若男女に普
 薩戒を授けたまひ翌年の三月まで北條の館におはしま
 し御化導大方ならざりけり或時道崇入道が不立文字と
 云ふことを問まへらせしに荒磯の浪もゑよせぬ高岩に
 かきもつくべきのりならはころと詠て示したまへり
 又諸行無常と云ふことを世の中は何あたとへん水鳥の
 はしふる露にやとる月影とよみて示たまへるも此

頃の事ありしにや斯て寶治二年戊申大師年三月十三日
 に永平寺へ販らせたまひしが最明寺入道頻に別を惜み
 たてまつり寺をも建て此寺を建長寺と名け後に留めま
 へらせられとも遂に都めきたる處には留りたまはさり
 しかは越前國六條と云る處にて永平寺の寺領二千石寄
 附したてまつりしに其れをも遂に受けたまはず剩つさ
 へ大師の御弟子の内にて玄明首座と云る僧が其寄進狀
 を持ち來りて誇り顔に人に觸れ知らせしを穢はしき心
 かりとて永平寺を逐出し常に玄明が坐臥せし床までも
 截取て棄させたまひけりとなん明れは寶治三年巳酉大

年五 正月元日の事なりしが羅漢供養を行ひたまひしに
 木像繪像の羅漢尊者皆光を放ちて堂の内を照したまひ
 又堂の外なる松の上に十六羅漢等ありくと現はれた
 まひ志を人々皆拜みたてまつりて昔志唐土天台山の石
 橋に顯はれたまひ志其後は曾て聞も及ばざる靈感なり
 とて皆々信心肝に銘じけり斯く世に比類なき道德の聞
 え忽ち天聽に達せしかは建長元年庚戌大師年の年の事
 とかや太上天皇後嵯峨院勅使を以て紫衣を賜はり志を辞み
 申せと許したまはざりければ永平雖谷淺勅命重重々却
 被猿鶴笑紫衣一老翁と詩を賦志て勅答志たてまつり

遂に其紫衣を召させたまはさりしとぞ然るに斯る高
 徳の御方にて免れさせたまふことの叶はざるは無常
 にて建長四年壬子大師年の五十三の夏の頃より聊か病の兆みえ
 させたまひ最後の教悔よとて釋迦牟尼如來の御臨終に
 説せたまへる遺教經に本きたまひ八大人覺と云ること
 を述させたまひけり斯て翌年建長五年癸丑七月十四日
 に永平寺をば孤雲懷奘禪師に譲らせたまひ八月五日に
 京都へ上りたまひける是は御親戚の久我家其他を始
 め波多野義重等が御病氣の由と聞て御療治のみは都と
 うとて頻に促したてまつりしかは孤雲禪師を伴はせたま

まひ徹通和尚をば木の目山より永平寺へ還したまひけ
 り其時草の葉に門出せる身の木の目山雲に路ある心地
 こそすれと詠せたまひしも早や御遺言にやとて人々
 涙に咽ひけりとなん斯て京都高辻西洞院の俗弟子覺念
 が家に宿らせたまひ太上天皇より遣はさせられたる御
 醫師の診察をも受させたまひしが或日室内と經行せたま
 まひつゝ若於園中若於林中若於樹下若於僧房若白衣舎
 乃當知是處即是道場乃諸佛於此轉於法輪諸佛於此而般
 涅槃と云る法華經の文を唱へさせたまひ又此文を面前
 の柱に書付たまひけり此在家の白衣舎にて涅槃したま

はんとおの思召なればなりかくて八月二十八日の子の刻に五十四年照第一天打箇躑躅觸破大千。噴。渾身無覺活陷黄泉」と云る偈と書たまひ掩然として入滅したまひしかば御親戚は更にも言ぎ波多野義重及ひ覺念を始め在家出家の御弟子等皆々悲嘆に沈みたる其中に孤雲禪師は暫志が程氣絶えてぞおはしける偕てあるべきに非されは御遺骸を東山に移し奉つり赤築地と云る處にて火葬たまへらせ九月六日に御舍利を収めて京を出て十日に永平寺へ着志十二日に入般涅槃の儀式あり本山の西北隅に葬り奉つりて御廟をば承陽庵と名けたまつり孤

雲禪師は其側に庵を結ひ自ら朝夕の供養に給仕たまひけり斯て大師御入滅の後御法孫ますく繁昌志中にも太祖瑩山國師出させたまひてより其御流いよく廣く今は天下に御一派の寺の數さへ二万に近く御德ますく熾んなれば嘉永五年壬子八月二十八日に六百回御遠忌と永平寺にて行はせたまひしとき先帝孝明天皇の勅詔にて佛性傳東國師と云る諡號を贈らせたまひ今上皇帝陛下は明治十二年の十一月に承陽大師と諡號を贈らせたまひ同三十五年の五月に大師六百五十回御遠忌豫修の際には御宸翰なる「承陽」の勅額を賜はり猶又同四

十二年九月廿日には皇太子殿下の御臨啓ありて大師の道風を感歎あらせられ宗旨の光り君が代とともに四海に輝くは誠に尊き次第なりけり

○太祖大師御傳

謹んで大日本國曹洞宗太祖能登國風至郡總持寺開山佛慈禪師弘徳圓明國師常濟大師瑩山紹瑾大和尚の御履歴を原ねるに御俗姓は藤原氏越前國多禰邑の人にして人皇八十九代龜山院天皇の御宇文永五年戊辰十月八日の御誕生あり初め大師の母にておはせし方は御年三十を超ゆれどもまだ一子もなきを歎きたまひ神に佛に祈誓を籠めたれど更に其驗あかりしに或時殺生の罪は諸の罪の中にも別て罪深く放生の善根は總ての善根の中にも別て功德多し世に子と持たぬ者あるは多くは前世に

殺生したる報ひありと聞給ひしより頻りに放生を行ひ
 つゝ一心不乱に一子を授けさせたまへと多禰の觀世音
 菩薩に祈りたまひし甲斐ありて程なく懐妊したまひし
 かは愈々信心肝に銘じ毎日觀世音菩薩を禮拜すること
 三百三十三拜又普門品を誦むこと三十三遍つゝ一日も
 怠りたまはざりしかば大師御誕生の初より尋常の小
 兒と事かはり三歳の頃より南無くんと唱ひつゝ佛を禮
 する姿をなし五歳の頃よば母と共に普門品を誦たま
 ひける斯て文永十年癸酉六師の春の事かよと或時つく
 く觀音尊像を仰ぎ見たまひ此菩薩は何程の功德あ

りて斯く諸人の恭敬供養を受けたまふにや且つ菩薩も
 亦た人なる歟との疑ひを起したまひ志より忽ち出家求
 法の志念を萌したまひけるこそ畏けれ頼て八歳建治元年
 乙の春に到りて父母に請ひ四月八日と云ふに永平寺へ
 登りたまひ徹通義介禪師の御弟子とこそはありたまふ
 斯くて十年が程は徹通禪師の御教を受け學問の窓に螢
 と集め坐禪の床に股を刺志夜を日に繼ぎて勉勵大方な
 らざりけり斯て弘安八年乙酉大師年の正月に徹通禪師
 に暇と乞ひ初て行脚に出たまひしか先つ大宋より來ら
 れしとて大善知識の聞え高き越前大野の寶慶寺宗圓和

尚うに参まゐつたままひ其まより京きやう都と萬ま壽じゆ寺じの寶た覺くわ禪ぜん師し白はく雲うんのおん應おん
 曉きやう和わ尚う等とうに見みえたままひ尋たづねて叡い山さんに登のぼりて天てん台だいの法ほふ門もんを
 學まなびたままひけり明あれば弘こう安あん九く年ねん丙ひやう戌しゆ十じゅう九く年ねんの七しち月げつに叡い
 山さんを下くだり紀き州しゅう由ゆ良らの興こう國こく寺じ法ほふ燈とう國こく師しを訪たづひままへらせて
 禪ぜん門もんの奧おく義ぎを扣くわき翌あした年ねんも亦また諸しよ方ほうを遊あそ歴り志して有あゆる知ち
 識しを尋たづねたままふに到いたる處ところ感かん賞しょうを蒙かかりて悟さと道だうの許ゆる可しは受う
 けたままへとも未いまた自みづから安やすんじたままはす遂つひに正ちやう應おん元げん年ねん成じやう
 子こ二に十じゅう一いつ年ねんのとし永えい平へい寺じに皈かへりたままひて徹てつ通つう禪ぜん師しに隨したがひ
 まへらせ翌あした年ねん己こ丑しう大だい師し禪ぜん師しと共ともに富とみ樞しゆ左さ衛ゑ門もん尉ゑい藤とう原げん家け
 尚うの請うに應こたへて加か賀がのおん大だい乘じやう寺じに赴まゐりたままひしが是この年ねん九

ままはく法ほふ華わ經きやうを讀よめたままひて父ちち母はは所ところ生な眼がん悉しつ見けん三さん千せん界がいと
 云いる文ぶんに至いたり大だいに悟さとりたままふ所ところありしかは直ちやくに禪ぜん師しに
 其その由よしを申まをさせたままひ是このより更さらに工こう夫ふを凝こと永えい仁に二に年ねん甲が
 午ご二に十じゅう七しち年ねんに至いたるままで常じやうに大だい乘じやう寺じに在ありて禪ぜん師しの教しやくと受う
 九くままひ又また此この間まに一切いっけつ經きやうをも讀よ了りやうさせたままひけり斯このて是この
 年ねん十じゅう月げつ二に十じゅう日にちの事ことありしが徹てつ通つう禪ぜん師し上じやう堂だうとて尊そんき法ほふ式しき
 を行まをはせたままひ平へい常じやう心しん是この道だうと云いふことを説せつたままふを聞き
 き豁くわつ然ぜんとして無む上じやう道だうを悟さとりたままひしかは翌あした年ねん乙おつ未み大だい師し
 年ねん二に月げつ十じゅう四し日にちに入い室しつせしめ永えい平へい高こう祖そより孤こ雲うん禪ぜん師し孤こ
 雲うん禪ぜん師しより徹てつ通つう禪ぜん師しへ三さん代だい相さう承じやうしたままへる袈け裟さは此この袈け裟さ
 高こう祖そ

自ら種たまひしを授かり日本曹洞第四祖の位とぞ繼せ
 者ありしとぞ
 たまひける此頃細川刑部太輔頼春の屬將にて加賀の富
 樫家の縁族なる阿波國海部の郡司某氏と云ふ人ありし
 が夙く國師の道德に皈依しまへらせ永仁四年丙申大正二年
 十に其海部の地に城満寺と云る寺を建て頻に請ひ申せ
 しかば遂に彼國に赴きたまひて郡司をはしめ遠近の道
 俗と教化たまひ其翌年は肥後國川尻なる大慈寺の寒
 巖禪師を訪ひまへらせ永仁六年戊戌大正十一年には城満寺
 にて始て授戒を行はせられ御化益大方ならざりしを
 正安元年己亥大正十二年のとき大乘寺徹通禪師より御使の

僧來り加賀へ皈らせたまふべき旨傳へられければ直に
 城満寺と去て大乘寺に到り兩三年が程は徹通禪師を補
 佐したてまつり時々は禪師に代りて説法たまひ傳光
 録と云る五十三則の正法眼藏を著したまひ志も此頃よ
 りの事なりしとぞ然るに徹通禪師は追々に老衰したま
 ひ最早や大乘寺の寺務にも堪させたまはねは乾元元年
 壬寅大正三年に大乘寺を大師に譲りたまひしかば出家在
 家の隔なく御弟子とかりて御教を受る者ますく多く
 總持寺の二代にならせたまへる峨山紹碩禪師も大乘寺
 の席を繼せたまへる明峰素哲禪師など云へる衆傑の宗

將も皆此頃に他宗より來りて宗旨を改め法を嗣ぎたま
 ひに方々なりとす是より五六年が程は常に大乘寺に在
 志て外には懇切に道俗の弟子を導き内には九十歳を越
 たまへる徹通禪師に孝養と盡し又其暇に坐禪用心記三
 根坐禪說信心銘拈提など云る宗門肝要の書を著はした
 まひしが徹通禪師は延慶二年己酉大師年の九月十四日
 に九十一歳にて遷化したまひしかは御葬儀其他の御追
 孝も大方ならず翌年九月の一周忌御法會に上堂したま
 ひしときはには天上をも感動せしめたまひしにや天華ふ
 りて本堂の邊に散亂れ參詣の道俗掌に掬る程の有様な

りしかは況て人間の感歎は限りもあらざる事ともあり
 けり此に加賀國淨住寺の可鉄鏡西堂と云る僧あり此人
 は先年阿波の城滿寺にて菩薩大戒を大師に受しより歸
 依敬慕の念ますく深く遂に應長元年辛亥四十四大師年のと
 こに淨住寺を國師に寄附し改めて開山第一世とあした
 てまつりしかは十月十日に淨住寺に移りたまひしが明
 れは正和元年壬子四十五大師年の春能登の國の大名にて滋野
 信直と云る人深く大師に皈依しませ同國酒井の士
 地若干を大師に寄附したてまつりしに其土地山水に富
 んで世の塵に遠ざかり最とも大師の御意に適はせられ

直に庵を結びてぞ住たまひける然るに又大乗寺の開基
 かる富樫左工門尉藤原家尙の嫡男にて藤原家方と云る
 人彼の酒井の庵を改めて伽藍建立に及び去かば翌年癸
 頓て落成志大師開堂志たまひて洞谷山永光寺と名け九
 まひけり然れば四方の學徒また此ふ集り壺庵至簡禪師
 珍山源照禪師あと云るも皆此時に宗旨を改め大師の弟
 子とありたまひ志あり偕又明る正和三年甲寅大師年
 は能登國羽喰の郡司得田某氏と云るが光孝寺を建て開
 山に講したてまつりければ是より五七年が程は加賀の
 大乘寺淨住寺能登の永光寺光孝寺の四箇處を巡りての

御化導なれども永光寺にればす日の多かりければ朝野
 の道俗大方は永光寺に集まりて教化を仰ぎたまつり
 滋野信直の妻の出家志て祖忍尼と名けられ婦人ながら
 も悟りを開きて遂に洞上聯燈の一人に加はり去も峨山
 禪師が國師の御像を寫し題贊を請たてまつりしも羅漢
 供養に十六尊者皆光を放ちて應現たまひ高祖大師が寶
 治三年に永平寺にて供養志たまひ去時の如くありける
 も又洞谷山の蓮華峰に圓通院を建立志て大師の御母の
 持念志たまへる觀音尊像を安置志たまひも皆此頃の
 事なりけり然るに能登國鳳至郡櫛比庄に諸嶽寺と名る

眞言の律院あり行基菩薩の開基として觀世音菩薩を本尊とし諸人の信仰あさからざる事なりしが元亨元年辛酉大師年の四月十八日に諸嶽寺の主なる定賢律師觀音の御告にて不思議の靈夢を感せし事ありとて其寺と大師に譲りたてまつりしかば是年六月八日と云ふに眞言律院を改めて曹洞の道場となしたまひ開堂の法式を行ひ諸嶽山總持寺とぞ名けたまひける斯く道德の聞に四方に高かりければ遂に天聽にも達しけるにや後醍醐天皇の勅詔にて孤峰覺明和尚を勅使に立られ十箇條の御疑難を大師に問はせたまひけり其第一條は祖意と教意と

是れ同きか是れ別なるか第二條達磨は是れ香至國王の第三子にして四大五蘊具足の身なり何に依て一莖の蘆に乗るや第三條禪宗に謂ゆる不立文字教外別傳と然と雖も一大藏經皆是文字なり禪家の語録また是文字なり若し文字なくんば佛祖の言教何に依て末世に流布せん第四條有るが曰く此身は四大假に合するかり命終の時地大は地に皈し水大は水に皈し火大は火に皈し風大は風に皈すと然らば則ち何物ありてか地獄に墮るや第五條人皆先考先妣の爲に靈供を備ひ茶湯を献きと雖も少許も消ることなし知らず供を受るや否や第六條世尊雪

嶺に於て六載修行し明星現するとき忽然として大悟し
 て曰く我と大地の有情非情と同時に成道すと悟人は最
 も成道すべし迷人何に依てか成道せん第七條金剛經に
 曰く一切諸佛及び諸佛の阿耨多羅三藐三菩提法皆此經
 より出つと金剛經は是れ釋迦佛の所説なり然も一切諸
 佛此經より出つと云ふ知らず此經を先となすか諸佛を
 先となすか第八條經に曰く大通智勝佛十劫坐道場佛法
 不現前不得成佛道と云云大通智勝佛すら十劫道場に坐
 して佛法現前せず今時の人一生坐禪修行して如何が佛
 道を成ぜん第九條經に曰く清淨の行者涅槃に入らず破

戒の比丘地獄に入らずと清淨の行者は涅槃に入るべき
 に何として入らずと曰ひ破戒の比丘は地獄に入るべき
 に何としてか入らずと曰ふや第十條朕趙州無の公案を
 以て提撕すること年尙志未だ透徹せざるを以て恨とあ
 す如何が工夫用心すべきや以上十の御疑問なり志か
 ば大師は一々之に答話を附けたまひ頓て奏上志たまひ
 しよその御答の妙あると本朝に佛法わたりてより以來
 未だ嘗て有らざるの法門なりとて殊の外叡慮に愜はせ
 られ御感斜ならずして再び勅使を能登へ降し紫衣を賜
 ひ且つ勅額を賜はりて總持寺を官寺の列に加へたまひ

けり然るに其翌年元享二年壬戌 皇后御懐妊につき總持
 寺の放光菩薩に勅願の旨ありしに靈驗著るをかりと
 て八月二十八日に綸旨を賜はり總持寺を以て日本曹洞
 の本山賜紫出世の道場と定めたまはりまかば是より更
 に曹洞宗の規模も立ち永平高祖の御門風いよく熾ん
 なるに及びけり斯て元享三年癸亥大師年の二月加賀の
 淨住寺をば無涯智洪禪師に譲り能登の光孝寺は壺庵至
 簡禪師に與へ翌年正中元年甲子 八月七日に總持寺をも峨
 山紹碩禪師に席を繼ぎめて退院上堂の式を行ひ大乘寺
 の明峰素哲禪師を伴ひて酒井の永光寺へ赴きたまひと

が明て正中二年乙丑大師年の春の頃より聊か病の兆む
 り七月俄に處々の御弟子達を集めたまひ八月八日に永
 光寺を明峰禪師に譲りたまひて永平高祖御臨終の儀式
 の如く八大人覺を説せられ十四日には御本師なる徹通
 禪師と御供養あり十五日の羅漢講式をも常の如く勤め
 たまひ少も變らせたまはざりしが夜半になりて俄に鐘
 を鳴らし大衆を方丈へ集めたまひて暫しが程御說法を
 り頓て自耕自種閑田地幾度賣來買去新無限靈苗繁茂處
 法堂上見插鋤人」と云る偈を書きたまひ扱てのたまひ
 けるは我れ化緣已に尽き泥洹時至れり釋迦牟尼世尊は

二月十五日之夜半に入滅したまひ我は八月十五日の夜半に衆を辞す同中に異あり異中に同ありなどのたまひつゝ坐禪の床に坐したまひしまゝ恬然として息絶たまひしかば大衆の悲歎かぎりなく中にも明峰素哲禪師は暫しが間氣絶して人事を辨へたまはざりし偕あるべきに非ざれば法の如くに入般涅槃の儀式を行ひしに遠近の道俗集ひ來て葬儀に列なるもの數万人二十一日に火葬したてまつりしに多くの舍利を得たりしかば大乘寺永光寺淨住寺總持寺の四箇所に分ち葬りて各々塔を建て傳燈院と名け供養したてまつる事とはおれり其後三

十年と過て後村上天皇深く國師の道德を追崇したまひ正平九年甲午の三月二日よ勅志て佛慈禪師と謚号を賜ひ更に又四百餘年を経て安永元年壬辰十一月二十九日に後桃園天皇の宸翰にて弘徳圓明國師の号を追謚たまひ我が天皇陛下は更に明治四十二年九月八日を以て常濟大師と謚號したまふかくて大師の徳光益輝き宗風日に盛んなるは實にも芽出度事なり

曹洞宗兩祖略傳終

明治四十二年十月八日印刷
明治四十二年十月十一日發行

發行兼
編輯人

曹洞宗務院

右代表者

東京市芝區芝公園第七號地貳番曹洞宗務院
赤澤亮義

印刷者

東京市芝區櫻田太左衛門町七番地
天沼米三

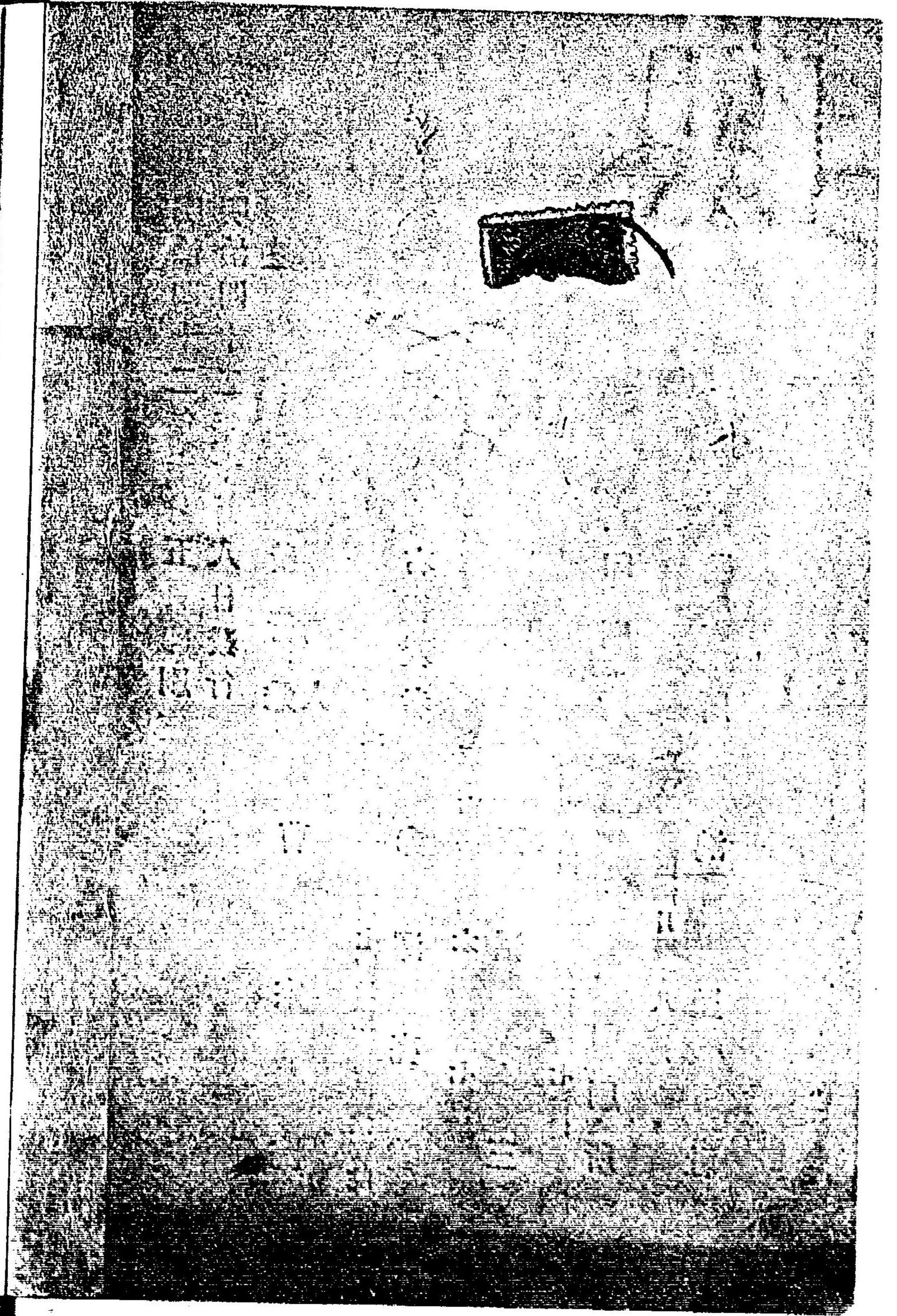
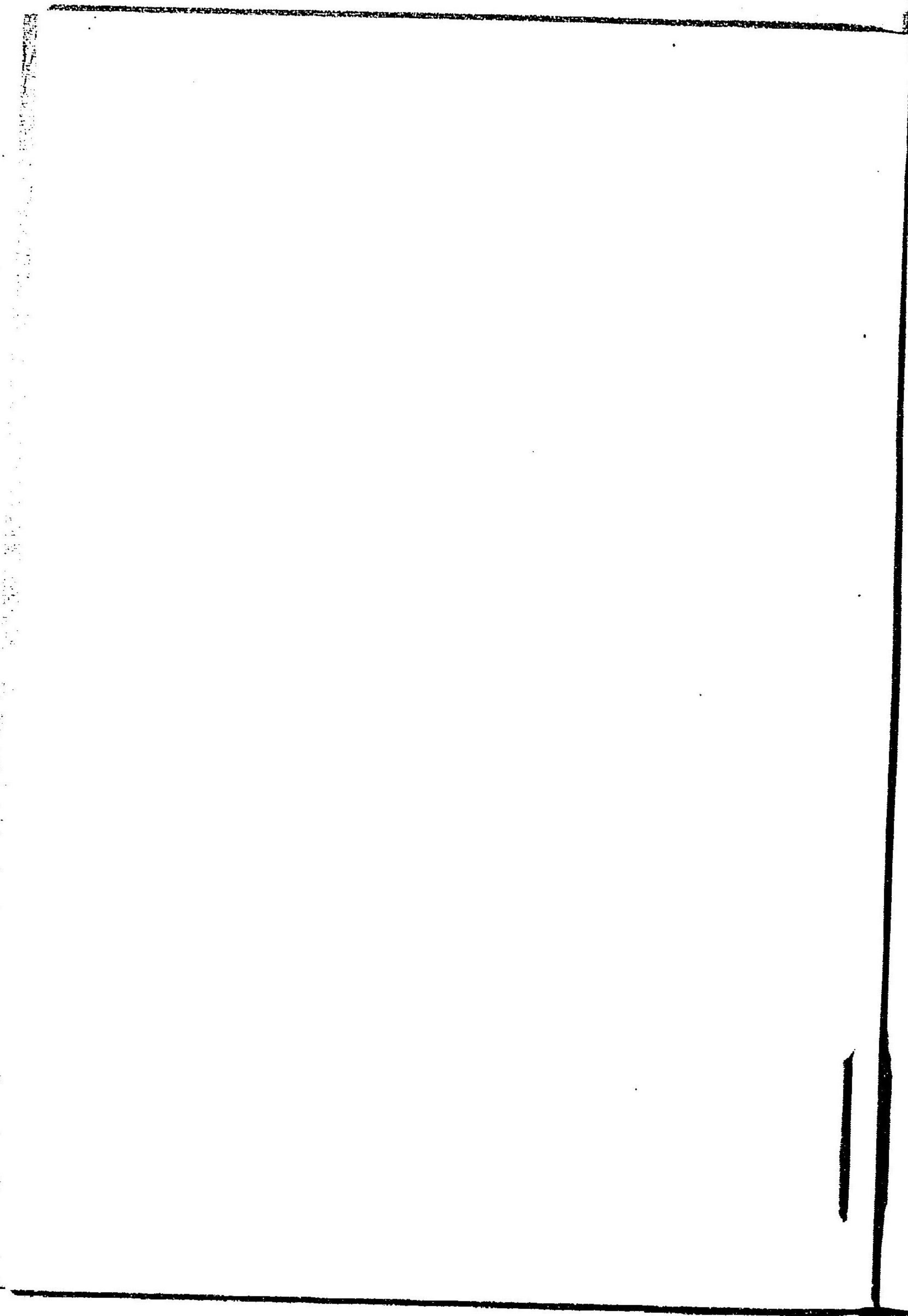
印刷所

東京市芝區櫻田太左衛門町七番地
製英舍印刷所

發賣所

東京市芝區露月町十八番地
鴻盟社





16

特50

369

曹洞宗兩祖略伝

国立国会図書館

019700-000-3

特50-369

曹洞宗兩祖略伝

曹洞宗務院

M42.10

ABG-0497

